

我が家の富山

中瀬 清

富山は遠くて近い。

私は生まれも育ちも北海道である。今も札幌に住んでいる。私の祖父は現在の富山県砺波市出身で、その昔未だ見ぬ北のフロンティアを目指して北海道に渡って来た、と言いたいところだが事実はこちらと違うようだ。農家の次男坊が食い扶持を求めて海を渡って来たというのが本当のところだ。祖父は様々な行商をした後に旭川で木材商を営んだ。

そのようなルーツを持つ我が家だが、富山愛は静岡出身の妻の方がずっと強い。なぜかと言うと、答えはただひとつ立川志の輔さんだ。妻は志の輔落語に完全にはまったのだ。札幌公演はもちろんのこと、渋谷パルコ、富山での落語会にも出かける。私も札幌、東京の公演と一緒に楽しむ。

妻曰く「富山出身の人は志の輔さんだけでなく、ふるさとを誇りに思っただけにしていない人が多い。それが富山のいいところ」ということだ。それには妻なりの根拠がある。その原点となるのが富山の薬売りである。昔から富山の薬売りは長い間行商に出る。長くなるとだんだんふるさとが恋しくなる。だからますます郷土愛が高まる。そのDNAが現在の富山人にも受け繋がれているというのだ。さしたる確証はないが何度も聞くといつの間にかそうかもしれないと思っただけだ。

私は退職後「北海道開拓の村」でボランティアガイドをしている。そこは明治時代の北海道開拓当時を展示する観光施設で、お客さんは全国からいらっしや

る。お客さんの希望に応じて毎回一時間半ほど同行ガイドをしている。ガイドをしている時、マニュアルにはないがお客さんにどうしても話したくなる話がある。それは北前船の話である。お客さんも北前船の話に興味を持ってくれる方が多い。中でも「昆布ロード」の話はよくする。そしてこの話の最後を「明治維新の影の主演は北海道の昆布、北前船、富山の商人です」と結ぶ。お客さんからの受けはいつも上々である。自分なりに勉強し、得た知識を話してお客さんに喜んでもらう、これこそがガイドの楽しみである。

私はいまでも時々北前船を学ぶ旅に出る。五年ほど前富山へ旅に出た。岩瀬を散策していた時、吹く風の冷たさに北海道を感じた。

「そうか、北陸富山は北国でもあるのだ」とその時思った。

もう三十年も前の話だが、富山に仕事で行った。その日の夜は訪問先が一席設けてくれた。富山のおいしいものをたらふくいただいた。食事の最後の頃を見計らってお膳がきれいに片づけられた。そして少し時間をおいて、白いご飯と味噌汁だけが出てきた。何も言わずどうぞという。食べて驚いた。そのお米のおいしいこと。「おいしいお米と薬は地元の水のおかげです」女将から聞いたこの言葉は今でも覚えている。

私が育った北海道の米は「やっかいどう米」という悲しい評価を昭和の時代ずっと受けてきた。しかしこの三十年で大変身した。いまではおいしい米の全国トップランキングの常連となった。苦労に苦労を重ねおいしい米が地元で作られるようになったことは郷土の誇りであり、心の豊かさにもつながった。なんといっても長い間「やっかいどう米」と言われてきたのだから。

今思えば三十年前、富山でいただいたあの白いご飯は究極のもてなしであっ

たのだ。

私たち夫婦は国内も海外もよく旅に出る。だが旅先での写真はあまり自宅に飾っていない。選ぶのに迷ってしまうからだ。飾っている数少ない写真の中に、富山の老舗の薬屋さんと一緒に撮った写真がある。マッターホルンや、ハワイの海をバックにした写真を差し置いて富山のこの写真が我が家のいい場所に飾ってある。因みにこの薬屋さんでは懐かしい熊の胆を見つけ購入した。買ってきてその後何度かお世話になった。今は成分が少し変わっているようだが、あの焦げたような独特の匂いと苦みと効き目は変わっていないかった。私が小さい頃、祖父が紙の包みから黒ずんだ熊の胆を取り出しナイフで削って飲んでいた記憶がある。ただ祖父の飲んでいたものはヒグマの胆だったに違いない。

十一月の末に富山が近くにやってくる。志の輔さんが富良野に来るのだ。コロナ禍でも、しかも地方の町にも来てくれる。ありがたい話だ。久しぶりに思いっきり笑えそうだ。

来年、コロナが治まることを期待してまた富山に行くつもりだ。妻がお勧めの薬膳料理とガイドをした時、富山のお客さんから聞いた、とろろ昆布おにぎりを食べようと決めている。コロナ禍でのささやかな私の願いだ。